

ミヒヤエル・エンデ著『はてしない物語』における 成長過程と成長概念について

小 林 良 孝

『はてしない物語』の中心テーマは何か。これについては、著者エンデ自身がきわめて明確に語っている。

エブラー モモというのは、モモが存在してはならない世界にいる。そこにそのままいつづける。バスチアン・バルタザール・ブックスの父親は、あいかわらず義歯をつくっている。バスチアン少年がもどっていく世界は、本質的には、いっさいなにひとつ変化していなかった。ちがうかな？

テヒル そうよ。でも、新しい共同体が成立したわ。

エンデ バスチアンのお父さんは義歯をつくっている。いったい、そのどこが悪いのだろう？ どうして変化していなくちゃいけないのかな？ なによりも問題は、別のところにあるのだよ。

「はてしない物語」でたいせつなのはね、バスチアンの心の成長のプロセスなんだ。彼はとにかくまず、自分の問題と対決することを学ばなくてはならない。彼は逃げだす。けれども逃げることは必要なんだ。なにしろ、逃げることによって彼は変わるんだし、自分というものを新しく意識するようになる。そのおかげで、世界というものに取りくめるようになる。物語の冒頭、父親に対する不安と、コレアンダーにたいする不安が描かれているが、じっさい物語は、そのふたつの不安の敷居をバスチアンがまたぐところで終わる。それから先どうなったかは、また別の物語でね、また別の機会に話されることになる。「はてしない物語」というのは、昔ながらの意味での教養小説で、そこでは心の成長というのが描かれている。だから産業社会やテクノロジーなどの問題とはいっさい関係ないんだ。なにしろバスチアンにとっては、まったく個人的なオデュッセイが問題なんだから。⁽¹⁾

『はてしない物語』の主要テーマは、10歳くらいの少年バスチアンの心の成長のプロセスだ、というのだ。テーマは心の成長のプロセスだというのだから、

身体の成長のプロセスは、主要な問題ではないのだ。つまり、バスチアン少年が、同級生との殴り合いのけんかに強くなるとか、50メートル走の成績が20秒から15秒にあがるとか、ボール投げの成績が20メートルから25メートルにあがるとかの問題ではないのだ。エンデがこの物語でテーマとしているのはそういう類の問題ではなく、10歳くらいの子供の心すなわち人格の成長、すなわち心の発達過程だというのである。つまりこの物語は、児童の発達心理の物語なのである。児童の心の成長と聞けば、子供っぽい人格から大人にふさわしい人格へと変化していくことを期待する。ではこの物語では、バスチアン少年の人格はどう変化していくのだろうか。その具体的な成長過程と具体的な成長内容を本稿で検討することにしよう。

I. 恐怖心

1. コレアンダー氏に対する恐怖心

『はてしない物語』は、雨の降りしきる11月のある日、朝8時を少しまわった頃、とある古本屋の店で始まる。この古本屋の主人はカール・コンラート・コレアンダー氏はいかつい体格の子供ぎらいの老人と呼ぶべき年頃の男である。いわば、K K K じいさんである。この日の朝、でぶで顔色の悪い10歳くらいの男の子が、ずぶぬれになって慌てふためいて、この店内に駆け込んできたのである。この少年がこの『はてしない物語』の主人公、バスチアン・バルタザール・ブックスである。いわば、B B B 坊やである。こうして、このB B B 坊やは、このK K K じいさんと面と向かい合って立つはめになったのである。

バスチアンは、このときコレアンダーさんから受けた第一印象を次のように述べている。

顔は赤ら顔で、その顔はかみつき癖のあるあのブルドッグを思い出させた。(2)

バスチアン少年は、コレアンダー氏に対して、目の前にいきなりかみつき癖のあるブルドッグと出くわしたような恐怖心を懐いたのである。コレアンダー氏にジロジロ見まわされると、牙をむき出しにして今にも襲いかかってきそうなブルドッグににらまれているような気がしてバスチアンの恐怖心はますますつり、背すじに寒気が走り、足は立ちすくむ思いであった。

コレアンダー氏の方も、バスチアンに対する敵意とでも受け取れるほどの軽蔑の念を、目つきや表情に表わしただけでなく、露骨な言葉でまくしたてる。

「フン、なんだガキンチョか！」そう言うと彼はまたさっきの本を開い

て、読み続けた。

その少年はどうしていいのかわからず、そこにつっ立ったまま、大きな目を見開いて、その男を見つめていた。ついにその男は、——前と同じようにページとページの間に指を差し込んで——パタンと本を閉じて、ブルドッグがうなるような声で言った。「おい、こら、おれは子供には我慢ができないんだ。このごろでは世間どこでも、おまえみたいな子供たちと、どはずれのから騒ぎをするのがはやりのようだが、——そんなことはおれはまっぴらだ！ 子供なんかだいつ嫌いだ。おれにとっては子供は、うるさい愚か者、だだっ子にすぎない。何もかもぶちこわすだけだし、本はジャムでよごすし、ページはむしり取るし、大人に心配をかけたり、大人を困らせたりするだけだ。……うちには子供用の本は置いてないし、うちの本は、どの本だっておまえなんかには売ってやらないぞ。さあ、わかったな！」……少年は黙ったままうなずいて帰りかけた。しかし、……もう一度まわれ右して、小さな声で言った。

「しかし、皆が皆、そうというわけではないのです。」⁽³⁾

これをきっかけにして、バスチアンとコレアンダー氏との会話は、もうしばらくは続いて行くことになる。けれども、ここまでで明確にされたことは、バスチアンのコレアンダー氏に対する極度の恐怖心と、コレアンダー氏のバスチアンをはじめとする子供一般への、これまた極度の露骨な嫌悪感なのである。

2. 学校友達に対する恐怖心

コレアンダー氏は、さき程バスチアンが店に駆け込んできた時の彼の様子を不審に思って、誰かに追われているのだろうと問いつめる。案の定、バスチアンは人に追われていたのである。しかし、コレアンダー氏の予想に反して、バスチアンは警官に追われていたのではなく、学校友達にいじめられて、逃げてきたのだという。登校時、校門の前で、彼の学校友達が彼を待ち伏せして、彼をつかまえてからかったり、こづきまわしたりして、彼をいじめるというのである。それで今朝も彼らから逃げてきて、逃げ込んだ所が運わるく、怖いコレアンダー氏の店だったというわけである。

「それでおまえは、されるままになっているのか？」

コレアンダー氏は、しばらくの間あきれてこの子の顔を見つめていた。それからたずねた。「なぜおまえはやつらに一発くらわしてやらないんだ？」バスチアンは目をまんまるにして彼を見つめて言った。「いやだよ。僕、そ

んなことはすきじゃないよ。——僕はボクシングは上手じゃないんだ。」

「じゃあ、レスリングはどうなんだ？」コレアンダー氏は知りたがった。「走りっこは？ 水泳は？ サッカーは？ 体操は？ おまえは、こういうことは全然だめなのか？」バスチアンは頭を横にふった。

「つまりおまえは、弱虫なんだ、そうだろう？」とコレアンダー氏は言った。

バスチアンは肩をすくめた。

「それにしても、口をきくことぐらいはできるだろう。なぜおまえは、馬鹿にされても口もきけないんだい。」

「いちど、そうしたんだけど……」

「それで？」

「やつらは僕をごみ箱の中へほうり込んで、ふたを閉めて、紐でくくりつけちゃったんだ。人に気づいてもらうまでに、僕は2時間も大声で助けを求め続けていたんだよ。」

「フーン」とコレアンダー氏はうめくように言った。「それでおまえは、今ではもう勇気がなくなってしまったというわけだ。」

バスチアンは、うなずいた。

「そのうえ、おまえは臆病者だってわけだ。」コレアンダー氏は、ずけずけと言った。バスチアンは、うなだれた。⁽⁴⁾

つまり、バスチアンは弱虫（体力・腕力が弱い）なうえに、臆病（気力が弱い）だというのである。それで、それらの学校友達が怖くて、学校へも行けずに逃げてきたというわけである。弱虫でもガリ勉屋で、せめて勉強の成績だけはいいのかと思って、そうたずねると、「去年は落第した」のだという。「なんてこった！ まったくいいところなし。」⁽⁵⁾の少年だったのである。

3. 学校と学校の先生に対する恐怖心

学校友達といえば学校、学校といえば学校の先生がいるにきまっている。では、バスチアンと彼の学校の先生との関係はどうなっているのであろうか。

例えば、歴史のドレーン先生。

…… この先生は、バスチアンが、戦争のあった年とか、歴史上の人物の生年月日とか統治期間とかを全然覚えることができなかつたので、バスチアンを皆の前で笑いものにするのが特にすきだった。⁽⁶⁾

体育のメンゲ先生もそうだった。

たぶん今日は、重いメディシンボールでドッジボールをするのだろう。バスチアンはこの競技が特にへただった。——だからどちらのチームも彼を自分のチームに入れたがらなかった。時々、石のように固い小さいボールでこの競技をさせられることもあったが、このボールにあてられたときは特に痛かった。バスチアンはいいカモだったので、いつも、しかも力いっぱい、ぶっつけられた。おそらく今日は、ロープ登りもあったかもしれない。——これはバスチアンが何よりもきれいな訓練だった。ほかの大多数の生徒は一番上まで登ってしまっているのに、バスチアンはいつも顔を真っ赤にしてロープの一番下に、小麦粉の袋のようにぶらさがったまま、半メートルも登れなかった。それでクラス全員、笑いころげてよろこぶのだった。おまけに、この体育のメンゲ先生もこのチャンスを逃さず、バスチアンをいいカモにしておもしろがるのであった。(7)

バスチアンが、日頃学校友達からいじめにあっていいることを察知している先生はひとりも居ないようであった。だから、バスチアンのための保護策は全々行われていないし、バスチアンをいじめにしている生徒たちに対する指導も何も行われていない。というより、このことに関しては何も物語られていない。

バスチアンがコレアンダー古書店に逃げ込んできた日の朝は、学校へは行きたけれども遅刻であった。バスチアンは、このときの気持を次のように述べている。

そこ、ここに歩いている人々は居たけれども、その大通りはひとつこひとり居ない街のように思われた。たっぷりと遅刻してきた者にとっては、学校の周辺は、人の死にたえた世界のようにうつるのである。バスチアンは、一歩進むごとに、心の中で不安がつるのを感じた。それでなくても前々から、学校はこわかった。バスチアンにとっては学校は毎日毎日、うちのめされているばかりの所だった。先生たちもこわかった。先生たちは、親切にバスチアンの良心に訴えかけてくるかと思うと、次にはバスチアンに彼らの怒りをぶちまけてくるのである。他の子供たちもこわかった。彼らは、バスチアンを笑いものにし、彼がいかに不器用で、いかにいくじがないかを思い知らせるチャンスをけっして見のがしはしなかった。バスチアンには、学校生活はもうずっと前から、無期懲役刑のように思われていたのである。(8)

バスチアンが、自分の学校の先生たちや学校生活全般に対してどう思っていたかについては、これ以上言葉をついやす必要はあるまい。

4. 父親に対する断絶感と恐怖心

コレアンダー古書店に逃げ込んで来たバスチアンとコレアンダー氏との会話は、まだまだ続いている。バスチアンは問われるままに、家庭のこともうちあける。お母さんは何年か前に死んでしまい、今は歯科技工師をしている父親と二人暮らしだという。この父子関係はどうなっていたのだろうか。ここ数年来の全般的な父子関係については、今朝の古書店内でのできごとの中では語られていない。これについては『はてしない物語』が更に進展して、母親の死が想い出される場面で語られることになる。

それからとうとう白衣を着た頭のはげた男の人がやってきた。そのひとは疲れきった様子で、悲しそうに見えた。彼はお父さんたちに、あらゆる手はつくしたのですがだめでした、残念でした、と言った。彼は、お父さんたちの手をしっかりと握って、「心からのおくやみ」を述べた。

バスチアンとお父さんとの間の関係が何もかも変わってしまったのは、その後だった。

変わったと言っても、変わったのは外面的にはではない。バスチアンは欲しい物は何でも買ってもらえた。三段ギアの自転車、電池で走る鉄道列車、たくさんのビタミンの錠剤、本を53冊、1匹のゴールデンハムスター、熱帯魚の泳いでいる水槽、小型カメラ、6本の特許つきのナイフ、その他、何でも買ってもらえた。しかしだ、本当のところはそんなものはどれもこれも、どうでもよかったのだ。

バスチアンは、お父さんは以前は彼とふざけてくれたことをおぼえていた。時々、物語を語ってくれたり朗読してくれることもあった。しかし、それはもう昔のこと。今ではお父さんと話をすることさえできないのだ。お父さんは、誰も通りぬけることのできない目に見えない壁にぐるりと囲まれているみたいだった。お父さんは、けっして叱ってもくれなかったし、ほめてもくれなかった。バスチアンが落第した時でさえ、お父さんはなにもしゃべってくれなかった。ただ、放心状態で、しかし悲しそうな面持ちで、バスチアンをじいーっと見つめていただけだった。バスチアンは、こう感じていた、お父さんにとって僕なんかはや全然存在さえしていないんだ、と。逆に、僕にとってお父さんなんかはや全然存在さえしていないんだ、とバスチアンはたいていの場合、感じていた。⁽⁹⁾

妻の死のショックで極度のうつ状態に陥ってしまった父。そんなお父さんはバスチアンにとっては、誰も通りぬけることのできない、バスチアンでさえも

通りぬけることのできない固い冷たいガラスの中深く閉じこもってしまったように見えたのである。そしてこの父親像が、バスチアンの心の中に定着してしまったのである。話はとんで、『はてしない物語』も終盤にさしかかる頃になるが、バスチアンが月の子・ファンタージェン国へ行って道に迷い、この現実界へもどる出口を探し出す手がかりをすべて失ってしまった時、その手がかりとなる最後の唯一のものとして、バスチアンが盲目の坑夫ヨルのミンロード抗、すなわち忘れられた夢の採掘坑から採掘しだした1枚のうんも層の中にとじこめられていた男の像は、正にまぎれもなく、この父親像だったのである。それはまた後の話。ここ当面は、この親子のどうしようもなく冷たい断絶感、お父さんにとっては自分なんかもう居ないも同然なんだというバスチアンの絶望感と虚無感、こういった感情がこもごも、このはてしない物語のここ当面の進展を支配して行くのである。

それでは、バスチアンは完全に父親に対する心のつながりを失ってしまったのだろうか。逆に、父親の方もバスチアンに対する愛情を完全に喪失してしまったのであろうか。上の引用文にすぐ続いて次のように述べられている。

お父さんが悲しんでいることは、バスチアンにはよくわかっていた。バスチアンだってあの頃は夜通し泣きあかすことはしょっちゅうだった。しかも、あまりにも激しく泣きじゃくるあまり、ゲロをはきながら泣くこともよくあった程だ。——しかし、そういうことは時とともに徐々に過ぎ去っていった。そして、依然として確かにバスチアンは存在していたのである。お父さんは、なぜ僕と話をしてくれないのだろうか？ お母さんのことなど、なぜお父さんは僕と話をしてくれないのだろうか？ なぜお父さんはすごく重要な用事しか話してくれないのだろうか？⁽¹⁰⁾

お父さんにとっては僕なんかはもう存在さえしていないのだ、というバスチアンの思いは、本当は思いすごしだったのだ。バスチアンの願望を満たすにはあまりにも不十分ではあったけれども、お父さんにとってはバスチアンは依然として確かに存在していたのである。願望が満たされないあまり、お父さんなんか僕にとっては存在していないも同然だ、と思いながらも、バスチアンは小さな胸の奥底で、お父さんの愛を求めて、熱い思いをこめて必死にお父さんに向かって叫びつづけていたのである。「お父さんは、なぜ僕と話をしてくれないのだろうか？」という思いは「お父さん！ 僕と話をしてくれよう！」という心の叫びなのである。バスチアンにとっては、お父さんは依然として確かに

存在し続けていたのである。今はひとまず消え去ってしまったかのように描かれているこの思いが、いうならば親子間の愛情が、そして更に心が成長してこれを普遍化するならば、人間愛が、この教養長編童話である『はてしない物語』の始めから終わりまで一貫して追求されている一番大切なテーマなのである。

この意味で、上に引用したこの一節は、この『はてしない物語』の進展を可能にする最も重要な鍵なのである。

父親の愛を求めて必死になって力の限り叫び続けていたとはいえ、それはバスチアンの深層心理の無意識の世界でのこと、意識的な日常生活の中では、父親はバスチアンにとっては冷たい近寄りがたい存在であった。その父の存在を否定的に意識することは、その冷たさから自分を守る自然な心の動きだった。とにかく、日常生活においては、バスチアンにとっては父はむしろとましい存在だったのである。

話を、この『はてしない物語』が始まった日の朝に、すなわちいわば今日の朝に、もどそう。逃げこんだ古書店でコレアンダー氏と話をしているうちに、店の奥の方の部屋で電話のベルが鳴りはじめる。コレアンダー氏はバスチアンとのおしゃべりを中断して、奥の部屋へ姿を消す。今までコレアンダー氏が座っていた皮のソファの上には、バスチアンがこの店の中へ駆け込んできた時、コレアンダー氏が読みふけていた本で、バスチアンと話し込んでいた間も片時も手から離さなかった本が、置かれていた。鉄が磁石に引き寄せられるように、バスチアンの心はその本に引きよせられた。見ると、その本は『はてしない物語』という標題の本であった。それは運命的なものであった。バスチアンは、そうっと手をのぼし、そのあかがね色の絹で装丁されている本に手をふれた。その瞬間、まるで「わなのかけがねがおりたように」バスチアンの心はその本にとらえられてしまったのである。奥の部屋にひっこんでいったコレアンダー氏は、電話口でなにやら話しこんでいる様子で、いつまでたっても店に出てこない。「バスチアンはどうしてもこの本がほしくなった。」「自分で気づく間もなかった。バスチアンはその本をオーバーの下にかくした。」⁽¹¹⁾そのままそおうっと店をぬけ出し、ともかくも学校へ向かって、ハア、ハア、息をきらし、横腹が痛むのもかまわず、走った。走りながら、バスチアンは思った。

こうなった今、当然、もう家へは帰れない。……バスチアンがすることのできる唯一のことは、どこかへ、遠くへ、逃げることだけだった。息子が泥棒になってしまったことを、お父さんに知られてはならないのだ。ひょっとしたらお父さんは、自分が居なくなったことに気づかないかもしれない。

こう考えることが、むしろ慰めであった。」⁽¹²⁾

こうしてバスチアンの心は、父親からドンドン離れていったのである。

バスチアンは走るのを止めた。今はゆっくり歩いていた。その大通りのつきあたりには校舎が見えていた。知らないうちに、バスチアンは通い慣れた通学路をたどっていた。その道路のあちこちには人々が歩いていたけれども、バスチアンにはその道路はまさに人っ子ひとり居ないかのように思えた。⁽¹³⁾

バスチアンの心の風景の中では、父親だけでなく、現実界の人それ自体がもはや存在しなくなっていたのである。

II 逃避

1. 身体の逃避

バスチアンは学校にはたどりついた。けれども遅刻だった。ともかくも、足どりは教室へ向かっていた。

バスチアンは、床磨き用ワックスの臭いや、湿ったマントの臭いがプンプン臭っている音のよく反響する廊下を歩いていった。校舎の中で彼を待ち伏せしていた静寂は、まるで耳に詰栓を詰めこんだように、彼の耳をふさいだ。ついに彼が、まわりの壁の色と同じく、古くなったほうれんそうと同じ色に塗られている彼の教室のドアの前に立った時、彼ははっきりと気づいたのである。たった今から以後は、たとえ自分がこの教室の中に居なくても居なくなったことにはならないのだ、ということに気づいたのである。だから彼は今すぐ、どこへでも行くことができた。

でも、どこへ？

こうしてバスチアンは、彼の教室の中での彼の存在そのものを自分で消し去ったのである。物語は次のように続いている。

バスチアンは、しあわせをつかもうとして、船員として雇ってもらって広い世界へ船出して行った少年たちの話を本の中で読んだことがあった。彼らは、海賊になったり英雄になったりしていた。何年も後に大金持ちになって故郷に帰ってくる者も居た。でも、誰もそれが昔のあの少年だとは気づかないのであった。

でも、そんなことをする勇氣はバスチアンにはなかった。だいいち、自分を船員として雇ってくれる人がこの世の中に居るなんて、想像することさえ出来なかった。それに彼は、そのような大胆な冒険に適する船が停泊

している港町へ行く道を全く知らなかった。

だから、どこへ行こうか？

突然、バスチアンはたった一つのよい場所を思いついた。あそこなら、——少なくともここしばらくの間は——誰も自分を探しに来る者はいないだろうし、見つかることもあるまい。

物置部屋は大きくて暗かった。ほこりと除虫剤の臭いがしていた。銅板でふいた大屋根を雨足が打っている音以外、物音は何も聞こえてこなかった。古くなって黒ずんだ太い柱が同じ間隔で床板から立ちあがり、ずっと高い所で屋根組みの梁と交わって、その先はぼんやりと闇の中に消えていた。あちこちにハンモック程の大きさのくもの巣がかかっている、すき間風でかすかに、無気味に、ゆれていた。天窗のある上の方から乳白色の光が差しこんでいた。…

ギーッと、ゆっくりとその物置部屋のドアが開いた。ほんの一瞬の間、長い光の筋がその部屋にさし込んだ。バスチアンは、その部屋の中へスルッとはいり込んだ。それからまた、ドアがギーッと鳴って、閉まった。彼は大きい鍵を内側から鍵穴にさし込んで、ぐるりとその鍵を回した。それから彼は更に、かんぬきをかけて、やっと安心してフーッと息をついた。

こうしておけばもう実際、見つかることはあるまい。⁽¹⁴⁾

こうしてバスチアンは、彼の現実世界のすべての人々から逃げ出し、すべての人々から身を隠したのである。バスチアンはこうして、父親からも逃げ出し、コレアンダー氏からも逃げ出し、学校友達からも逃げ出し、学校の彼の先生たちからも逃げ出し、誰にも気づかれることなく、学校の屋根裏の物置部屋に逃げ込んだのである。バスチアンは、自分の安全を確保することのできる世界を、この物置部屋の中でやっと見つけ出したのである。そして、家庭の中で自分で消去した自分の存在を、学校の教室の中から自分で消去した自分の存在を、この物置部屋の中でやっと再び見出したのである。そして、自分の身体の安全を確信することのできる限りでの心の安全も、彼はやっとここで実感することができたのである。これはまずは、彼の現実世界からの彼の身体の完全な逃避であった。

バスチアンは、この物置場を前からよく知っていた。使い古した椅子や机や教卓、ひびの入った古い黒板、地図などの掛け台、マットや跳馬などの体育用具、理科の教材の狐や鷲の剥製、それに人間の男の完全な骸骨までぶらさげて

あった。しかしバスチアンは、もう見慣れていたせいも、何もこわくはなかった。その他、いろいろな物が雑然と置いてあった。バスチアンはずぶぬれになったマントと長ぐつを脱ぎ、灰色の軍用毛布を肩からかけて体にまとい、マットの上にきちんと座って、今しがたコレアンダー古書店から盗んできた『はてしない物語』という本を手にとった。不思議なくらい、おごそかな気分であった。その本を開いて、第1ページから読み始めたのである。

2. 心の逃避

バスチアンは背が低く、エックス脚で、でぶで、顔色が悪かった。その上、体力が弱く、不器用でのろまだった。だから、体育の成績は悪かった。他の科目の成績だって、体育の成績よりけっしていいわけではなかった。去年は落第していたのである。バスチアンが得意だったのはたったひとつ、それは空想すること、物語を作ることだけだった。そして、バスチアンが好きなことはたったひとつ、それは本を読むことだけだった。

人間の情熱とは不思議なものである。子供だって大人だって、それにちがいはない。情熱のとりこになってしまった者は情熱を説明することはできないし、情熱を体験したことのない者は情熱を理解することはできないものだ。山頂を征服するために命をかける者も居る。実際、その理由を説明することができる者は誰ひとり居ない。その当の本人だって説明することはできないのだ。目もくれようともしてくれない人の心を得ようとして破滅する者。美食・美酒の享楽に負けて身を持ちくずす者。賭事に一切合切の財産をつぎこむ者。けっして実現されることのできない固定観念のためにすべてを犠牲にする者。今居る所以外の所へ行きさえすればしあわせになれると信じこみ、一生の間世界中を旅する者。権力を獲得するまで心がやすらぐことのない者。要するに、人さまさまのように、情熱もまたさまさままで無数にあるものなのである。

バスチアン・バルタザール・ブックスにとって、それは本であった。⁽¹⁵⁾

読書は、バスチアンが自分の全霊・全情熱を注ぎ込むことのできる唯一のことだったのである。つまり読書は、彼のうちひしがれた心の唯一の逃避場所だったのである。

そして、人知れずひそかに学校の物置部屋にまずは彼の身体を逃避させることに成功したバスチアンの唯一の心の逃避場所となったのは、今朝、彼がコレアンダー古書店から盗んできた『はてしない物語』という本だったのである。

ここで、本稿の論旨を混乱を起こさず正しく理解してもらうために、一つとりきめておかなければならない。我々が手に取って今読んでいる本は、『はてしない物語』という標題の本である。ところが、この本をここまで読み進んできたところ、この本の主人公バスチアンがコレアンダー古書店から1冊の本を盗んできて、その本を今ここで読み始めたのである。その本の表題もまた『はてしない物語』であった。つまり、『はてしない物語』という本の中に、また『はてしない物語』という本が登場してきたわけである。ここで、ひとつ取り決めをさせてもらおう。我々が手に取って読みはじめた『はてしない物語』は、『はてしない物語』・A本と表示し、この『はてしない物語』・A本の中に登場してきた『はてしない物語』という本、つまり、バスチアンがコレアンダー古書店から盗んできた『はてしない物語』という本は、『はてしない物語』・B本と表示することにしよう。

それで、誰ひとりにも知られずにひそかに学校の物置部屋の中へ逃げ込むことに成功したバスチアンが、全霊・全情熱をかたむけて読み始めた本は、『はてしない物語』・B本だったのである。それでここからは、『はてしない物語』・A本の内容は、バスチアンと『はてしない物語』・B本との関係へ進んで行く。

バスチアンが一心不乱に読みはじめた『はてしない物語』・B本は「おさな心の君」というお名前の女王様が君臨している「ファンタージェン」という名前の国の物語であった。この物語は、次のように語り始められている。

ハウレの森の動物たちは皆、自分のほら穴や、自分の巣や、自分の隠れ家の中に身をひそめていた。

真夜中だった。太古からの巨大な樹木の梢は、嵐に吹かれてザワザワと鳴り響いていた。

こんな森の奥深く、とある岩角の岩棚で、偶然に3人のファンタージェン国の住人が出会ったのである。ひとりには鬼火族、ひとりには岩食族、もうひとりには豆小人族で、各々、ファンタージェン国の全くちがう方向の地方(国)の住人で、皆お互いに初対面であった。恐る恐る話しあってみたら、各々全員、各々の種族を代表する使者で、各々の国で起こっているゆゆしい現象を、ファンタージェン国の女王おさな心の君へ報告しに行く旅の途中だ、という。彼らの話によると、驚くことにいずれの国においても、そしてその他の地方でも、一様に「虚無」⁽¹⁶⁾が発生して、それがどんどん拡大してきて、国土それ自体もその住人も、その「虚無」の中へどんどん飲み込まれていく、というのである。こんな情報を交換しあってファンタージェン国を襲ってきた危機に驚き、恐れ、腰を

おろし休むひまもおしんで、一刻も早く女王「おさな心の君」の所へ到着しようと、各々再び自分たち独自の旅の乗り物に乗って、ハウレの森の闇の中へ旅立って行く。

他方、時を同じくして、ファンタージェン国の中心にあるエルフェンバイン塔では、女王おさな心の君が、原因不明の病におかされはじめて、病床に臥せていたのである。ファンタージェン国の津々浦々から 499 人の誉れ高い名医が召集され、一人ひとり全員、おさな心の君を診察してみたけれども、誰ひとり、女王様のご病気の原因も、病名も、ましてやそのご病気の治し方も、知らなかった。

女王おさな心の君の病の進行は、ファンタージェン国を襲ってきた「虚無」の拡大と全く同じことなのである。だから、もしもおさな心の君が、この病気で崩御することにならば、それはファンタージェン国が「虚無」に飲みこまれて消滅することになるのである。それ故、ファンタージェン国を虚無による消滅から救うためには、是が非でもおさな心の君を、この原因不明の難病からお救いしなければならないのである。

国の存亡の危機に陥っている今、おさな心の君のご病気を治すことのできる医者が現れるのを、臥してただ待っている時間のゆとりはなかった。そこでおさな心の君は、この病から自分を治し、同時にファンタージェン国を滅亡から救うことのできる救済者を探し出し、病床の自分の所へ連れてくる「おおいなる探索」⁽¹⁷⁾の任務を、ファンタージェン国の緑の肌族の勇敢なる狩人アトレユに命じたのである。アトレユもバスチアンとほぼ同じ年齢で、10 歳くらいの少年であった。

バスチアンが学校の物置部屋に逃げ込んで、ひとりひそかに一心不乱に読み始めた『はてしない物語』・B本は、アトレユの「おおいなる探索」の大冒険談だったのである。

この『はてしない物語』・B本が、バスチアンにとってどういう意味を持つことになるのかを明確にするためには、この物語の著者ミヒャエル・エンデの文学創作の基本構想を理解しておくほうがいいであろう。これについては、ミヒャエル・エンデ自身、いろいろな機会にほぼ同じ趣旨の発言をしているが、井上ひさし氏との対談で語っている言葉が最も簡潔明解であろう。

エンデ 私の文学の創作法は、外の世界を内の世界に、内界を外界に換えて描くという互換の方法をとっていますが、…⁽¹⁸⁾

だから、エンデの作品には、外界を内界に換えて描いているものと、これと

は逆に、内界を外界に換えて描いているものとの二種類のものがあるはずである。

『はてしない物語』・A本で言えば、外の世界とは、バスチアンが現実生活中に生活している彼の家庭とか学校とか街とかの風景である。内の世界とは、彼の心の中の風景、すなわち、前半の「おさな心の君」のファンタージェン国の風景と、後半の「月の子」のファンタージェン国の風景である。

『はてしない物語』・A本の前半、すなわち

「塔の時計が12時を打った。」⁽¹⁹⁾

という箇所までは、内界を外界に換えて描いている場面と、逆に外界を内界に換えて描いている場面とが、目まぐるしく入れかわりながら話が進んで行く。バスチアンが『はてしない物語』・B本を読みはじめた頃は、どちらかと言えば、内界（おさな心の君のファンタージェン国の風景）が外界（バスチアンが現に居る学校の物置部屋の中の風景や現象、あるいは教室の中の様子、あるいは家庭内の日常生活）に置き換えられて物語られる場面が優勢である。例えば、バスチアンは、ハウレの森の樹木の枝がきしみ合う音を、物置部屋の中で聞いているような気がしている。しかし、バスチアンが『はてしない物語』・B本を読むのに熱中して行くにつれて次第に、逆に外界を内界に換えて描く場面が優勢になって行くのである。例えば、アトレューユがイグラムールに睨みつけられる情景を読みながらバスチアンは思わず恐怖の叫び声をあげてしまうのだが、バスチアンのその叫び声はそのまま、物語の中のイグラムールのいる谷間に響き渡るのである。あるいはまた、学校の物置部屋の中で本を読みふけているバスチアンの姿が、まごうかたなく、物語の中の「南のお告げ所」の「魔法の鏡」にはっきりと、うつし出されたりするのである。これは、外界のバスチアンの願望をうつしたものである。結局はバスチアンは、ひとたびは完全に内界（ファンタージェンの世界）へ移しかえられて行くのだが、本稿では教養長編童話としての観点から、この作品のあら筋を追うことにしよう。

「おおいなる探索」の任務をひき受けたアトレューユは、女王おさな心の君からお守り「アウリン」を授けられる。アウリンとは黄金のメダルで、その表には、互いに相手の尾をくわえ合って楕円形を形成している明の蛇と暗の蛇が浮き彫りになっている。アトレューユは一切の武器をたずさえず、アウリンを首にかけ、愛馬アルタルクスにまたがって、最速「おおいなる探索」の旅に出る。どの方角へ進むべきかさえ全く見当がつかないので、アルタルクスの足のむくままに進む。アトレューユは毎晩、巨大な緋色の牡牛の夢を見る。7日目の夜、

その牡牛がアトレユの夢枕に立って、次のように言う。

「もしおまえがこのおれを仕留めていたなら、おまえは今は一人まえの狩人になっていただろう。しかしおまえはそれを断念した。こんどはおれがおまえを助けてやろう。アトレユよ、よく聞け！ファンタージエン国には、誰よりも年をとっているひとりの生き物がいる。ここからはるかに、はるかに遠い北の国に憂いの沼がある。この沼のまん中に甲羅山がそそり立っている。そこに太古の沼ガメ、モルラが住んでいる。モルラをたずねて行け！」⁽²⁰⁾

そこでアトレユは北へ北へとアルタルクスを進める。ついに憂いの沼にたどりつき、沼の中へとアルタルクスを進める。しかし、アウリンを持っていないアルタルクスは、憂いの沼の泥に足を取られ、そのまま憂いの沼の底深く沈んでしまう。まったくひとりになったアトレユはついに甲羅山にたどりつく。その甲羅山が太古の沼ガメ、モルラであった。モルラは、年を取りすぎていて何もかも物憂がって、アトレユの相手をしようとしなない。甲羅の中へ首をひっこめてしまいそうになるモルラから次の二つのことを聞き出す。

おさな心の君は、新しい名前を必要としておられる。新しい名前をつけてさしあげれば、女王様はまたお元気になられるということ。

でも、女王様に新しいお名前をつけてさしあげることのできる者は、ここファンタージエンの国には居ないし、それが誰なのかは自分（モルラ）も知らないということ。

では、女王様に新しい名前をつけてさしあげることのできる者が誰なのか、これを知っている人は、どこに居るのか、アトレユはどうしても口をききたがらないモルラに必死になってたずねる。ついに、モルラは答える。

「たぶん、南のお告げ所のウユララ、あれが知つとるじゃろう。…」

「そこへは、どう行けばいいのだ？」

「おまえがあそこへ行くことは絶対にできぬわ。旅の日を一万回かさねても無理じゃ。おまえの命の方が短すぎる。あそこへたどりつく前に、おまえは死んでしまう。遠すぎるのじゃ。南のはてじゃ。とにかくずうーっとはるか遠すぎるのじゃ。…」⁽²¹⁾

たとえかなわぬにしても、アトレユは「南のお告げ所」を目ざして、ひとり更に旅を続ける。困難な旅を続けたあげくのはてに、深さも知れず、左右の長さも知れない大地の裂け目に行く手をはばまれる。その深淵に張られたねばねばした太いロープのわなに、「幸いの竜」フツフルがかかっている。世にも

